

[第637回 大阪放送番組審議会議事録]

1. 開催日時 新型コロナウイルスの感染リスクを避けるため、会議室での審議を止め、委員全員に書面参加で対応してもらった。書面提出の期日を令和3年5月27日(木)とした。

2. 開催場所 上記参照

3. 委員の出欠 委員の総数 6名

※ 新型コロナウイルスの感染リスクを避けるため書面参加で対応

書面参加の総数 6名

書面参加の委員氏名

成瀬 國晴	河内 厚郎
たつみ 都志	鎌田 雅子
萩原 章男	内田 透

4. 議題

1) 番組審議(書面参加) 『芸坂の風』

2) その他

5. 議 事 の 概 要

議題 1) 『芸坂の風』

について、番組の企画意図・内容の資料をご覧のうえ、番組を聴取してもらい、書面でご意見を提出してもらった。

6. 審 議 内 容

社 側 <番組資料を送付>

『芸坂の風』は、大阪芸術大学で2月4日に行われた特別講義の様子を収録した特別番組です。講師は大阪芸術大学映像学科出身の作家・山内マリコさん。インタビュアーは和田麻実子アナウンサーです。山内さんが原作者である2月26日全国公開の映画『あのこは貴族』の試写会を芸大映画館で開催、その直後に特別講義を開講しました。

番組では、山内マリコさん原作の映画「あのこは貴族」や大阪芸術大学在籍時代の思い出について大阪芸術大学の学生たちと一緒にリモート形式でインタビューを実施しています。

「あのこは貴族」は、都会で異なる環境を生きる2人の女性が、恋愛や結婚だけではない人生を切り拓く物語です。映画では都会の箱入り娘・華子を門脇麦さん、地方から上京し自力で生きる女性・美紀を水原希子さんが演じ、20代後半から30代にかけての息苦しさを抱える女性たちが軽やかに変化していく姿を描いています。山内さんは、「あのこは貴族」を描いたきっかけを「作家生活を通して初めて出会った“違う価値観”の人々を、自分のパーソナリティである地方出身とは正反対の東京出身のキャラクターとして描いてみたかった」と、振り返りました。

また、トライ&エラーを繰り返し「文章を書きたい」という自分の道を見つけるまで、学生時代の4年が今でも自分の土台になっていると話します。最後に、「卒業して10数年経った今、好きなものを見つけても、学生時代に“あ、これいいな！”と発見した喜び、過ごした時間の貴重さには絶対に敵わない。学生生活の中で試行錯誤する時間を大切にしてほしい」と学生へメッセージを送りました。

<各委員の書面でのご意見>

委員 この企画は、大学での試写会＋特別講義というプログラムとしては成り立っているのだと思う。しかし、一般リスナーに届けるラジオ番組として考えた場合、何を伝えたかったのか、どのような効果を狙ったのか、今一つつかみどころがなかったというのが正直な感想だ。

「芸坂の風」という番組タイトル、キャンパスに続く坂道を「学生が可能性と挑戦を磨く場所。未来への第一歩を歩む坂」となぞらえたオープニングのコンセプト説明から、卒業生である山内マリコさんが、自らの経験をもとに後輩たちへ熱いメッセージを送る内容なのかと期待した。だが、冒頭からの主題は映画の話。あらかじめ試写を見た聴講生はあらずじ、登場人物を知っているが、リスナーは一切わからないまま、いきなり「ハナコ」「コウイチロウ」という登場人物について語られてもついていけず、その後のやりとりもなかなか入ってこない。せめて、番組ではリスナー向けにあらずじ紹介があった方がよかったのではないだろうか。

単に番組の構成面から考えれば、山内さんが学生時代を振り返るパートが先にあった方がよかったかもしれない。「4年間を通して自分が作られていった」「トライ&エラーを繰り返し、やりたいことにたどりついた」という山内さんの言葉は非常に興味深く、「芸坂の風」という番組名にもふさわしい。欲を言えば、山内さんの学生時代の具体的なエピソードや思い出…故郷から大阪へ出てきたときの思い、トライ&エラーの中身、友人との交流、喜びや挫折…などについて、もっと掘り下げて聴いてみたかったと感じた。

今回は特別番組とのことだが、若者が希望を持ち、夢に向かって進んでいく後押しをする、ヒントを投げかける、そんな番組の提供を今後も期待している。

委員 大阪芸術大学の番組だから仕方ないが、少しCMカラーが強すぎないか？武庫川女子大がスポンサーになっている番組を聞いたことがないので、なんとも言えないが（笑）

山内マリコさんは雄弁で、そのトーンにどっぷりつきこんでいる和田さんのMCが気にかかった。もっと突っ込んで欲しかった。スポンサー番組だから出来ないのか？

前半「“あのこは貴族”について」

創作の裏話に入る前に、この映画のあらずじを話してほしかった。（放送当時は、公開前だったからできないのかもしれないが）

山内マリコさんの話し方は、要領がよく端的で聞きやすかった。最近の作家は話し方も上手なのか、芸大での訓練の賜物か？ただ佳境に入ると早口

になると聞き取りづらい。

和田さんは、同じ調子でテンション高くなっている。これでは逆に聞き手がしらける。

「明治維新の成功者がそのまま続いている」という例で慶応大学をあげたのは分かりやすかった。

後半「大阪芸大の学生時代」

映像学科の実態が分かって面白い。大学や学部の選択に迷っている高校生にとっては役に立つだろうと思った。ただ、和田さんはもう少し遠隔的というか、「進路の決め方、人生の岐路」的な観点まで広げてよかったのでは？

委員

大阪芸術大学映画館で、映画『あのこは貴族』の試写会後に行われた特別講義は、原作者である映像学科出身の作家・山内マリコさんに和田麻実子アナウンサーがリモート形式でインタビューしたもので、番組ではそのもようを伝える。

富山出身の山内さんは、大阪芸大に進学、関西に住んだのち、東京に移住、作家デビューしてから、作家という立場でしか出会えない人との交流を通じて、東京に存在する「お嬢様」を知り、その実態を描いたものがこの作品。東京のお金持ちの特殊さ、お金持ちの见ている世界の幅の広さを感じたという。お金持ちの小さなサークルが、たどっていくと明治維新にまで繋がる。明治維新のときに勝った人たち、権力を維持しながら国が作られていったので、実はそこから延々と続いている。例えば、慶応大学。福沢諭吉の時代にはラジカルな、やる気のある若者の学びの場だったけれど、自分の息子を入学させて凝り固まった学閥になってしまう、それが象徴的。物語の入り口は（松濤に住む）華子の婚活だが、東京だけに限らず日本の社会の階層の歴史も描けるんじゃないか、そこを感じてもらえるんじゃないかと思いながら書いた、と語る。でも本当は関西の方が、もっと凄いと聞いたらしく「有名な（兵庫県）芦屋の（和田アナが六麓荘と名をあげる）、そう六麓荘。たまにいましたよ、あの子、本当にお嬢様で仕送り何十万とかいうのを聞いて、ぜんぜんリアルに響かなかったが、今思えば、六麓荘の子だったんじゃないか」。

この映画の監督・岨手由貴子や出演者の門脇麦、水原希子などの才能が、撮影現場を見た山内さんから語られる。監督が、シーンのシチュエーションとは別に「心の中では、こう思っていてください」と指示して、俳優にチョットだけヒントを与え、後は役者が自分なりに咀嚼して、表情を引き出す。情報量の多い芝居になった、演出のセンスと才能に感心したと話す。

水原希子の演じる大学生の原石の魅力は泣けるほどグッときて、彼女のパブリックイメージとは違う芝居に惹きつけられたが、2・3度見ると、門脇麦の演技が緻密で、ミリ単位で表情を動かすことで内面を表現していて、見応えがある、と二人の演技を絶賛している。

誰でも、こうして作り上げられた作品を見てみたくなるだろう。

学生時代の試行錯誤を繰り返す時間が無駄ではないことが、現役の学生たちに勇気を与えるが、(資料に書かれている、最後の)山内さんからの学生たちへ向けたメッセージは放送されなかったのでは？

委員

この番組をどう聞けばいいのか正直戸惑った。

講義自体は、試写会を見た人に向けた講義であって、ラジオリスナーに向けた講義ではなかったと思われる。

映画を見ていないとわからない会話で終始進んでしまっていた様に思う。

ラジオ番組として、誰に向けた番組なのか、聴いている人になにを伝えたいのか、どう思っしてほしいのか、私はこの番組にこめられた思いがわからなかった。

この講義をラジオ番組として流すのであれば、ラジオリスナーに向けた番組構成が必要だったかと思う。

大阪芸術大学がスポンサーとなり、大学のPRの一環として制作された、ということは分かる。

「優秀な人材を多く輩出している」

「卒業生がこんな素晴らしい作品を生み出した」

「芸術を学ぶ最高の環境が整っている」など、

番組として伝える主張があるのであれば、もっとその主張に沿った番組作りができるのではないだろうか。

映画自体はキャストも豪華で面白い映画なんだろうと思われるが、ストーリーを知らずに解説だけを聞いているのはとても残念な気持ちが残ってしまった。

委員

大阪芸術大学の学生たちと映画「あのこは貴族」試写会のあとで原作者山内マリコさんとのリモート形式のインタビューを収録した番組だが、彼女とOBCアナウンサー・和田麻実子さんとの対談で総論はわかったが映画の公開前だしリスナーには東京には本当の金持ちと成金がいるということ以外ストーリーはわからないだろう。

むしろ、山内さんが出た大阪芸術大学で何を学び、何を考え、何を見つけたかということの方に興味があった。

大学は勉強するところではなく研究するところ、自己発見、自己啓発の場だということを知り、30年間他大学で教えてきたわたしにとって「大学を出るときにいい友達ができ、自分の土台が作られた、これがよかった」と言う山内さんのことばはすてきだった。

これが伝えられたことがこの番組のすべてだと思う。

愚娘もこの芸坂の風をまとめてテキスタイルを学んだ。

芸坂の風は、いま主婦業をしながら、花の写真撮影に活かされている。

委員 山内マリコさんがプロの小説家になれたのは、学生時代に培った文章を書く土台があったからという話は、大阪芸術大学を志し、頑張りたいと思う学生はあこがれを抱き、学生生活でも励みになるのではないかと思う。

ただ、申し訳ないが、山内さんの小説を読んだことがないので、一節でもいいから朗読や会話を再現して欲しかった。作風の一部にでも触れることができれば、山内さんのいろいろなお話にもう少し共感できたのかなと思う。

スポンサーのこともあるのだろうが、ターゲット層だけでない、できるだけ多様なリスナーが、山内さんご自身と小説を理解し共感を持てることを目指してもいいのではないか。共感とは総括された良いメッセージよりも、具体的で泥臭いエピソードや濃密な人同士の関わりのエピソードから得られるものだと思う。結果として、ターゲットとしたい学生にも大学の良さが伝わると思うのだが。

社 側 書面での貴重なご意見、ありがとうございました。

以上

7. 審議会の答申又は改善意見に対してとった措置および年月日

な し

8. 審議会の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表内容・方法及び年月日

- ・「番組審議会だより」 (第637回大阪放送番組審議会議事録の要約)
「愛してラジオ大阪」 内で放送
放送日 令和3年 6月 23日 (水) 23時20分～23時30分
- ・「番組審議会だより」 (第637回大阪放送番組審議会議事録)
ラジオ大阪ホームページ (<http://www.obc1314.co.jp>) に掲載
- ・ 番組審議会の議事録の原本は事務局立ち会いのもと閲覧に応じる。